

在宅医療における鍼灸治療の応用の試み

江川 雅人, 福田 晋平, 鶴 浩幸, 片山 憲史

保健・老年鍼灸学講座

地域在住の高齢者1例を対象に在宅医療における鍼灸治療の応用を試みた。症例：83歳女性。診断名：脊椎側弯症，変形性腰椎症，脊柱管狭窄症，変形性膝関節症，高血圧症等。主訴：腰痛，膝痛，歩行困難。10年程前より腰痛を自覚し，コルセットが処方されたが次第に歩行困難が悪化した。夫と二人暮らし。週1回デイケアサービス，月1回本学附属病院を受診していた。杖付き，歩行器を用いての自力歩行は可能。腰部は腰椎右側弯，腰椎の傍脊柱から側腹部に疼痛と圧痛，下腿のだるさと冷感を認めた。膝関節には内側裂隙部から鵞足部に圧痛，大腿四頭筋の緊張と萎縮を認めた。鍼灸治療は疼痛には圧痛点や筋緊張部位を治療点とし，置鍼術や温灸療法を行った。治療頻度は1回／週程度とした。歩行機能は携帯型歩行測定器とTimed Up and Go testにより，活動機能は老研式活動機能評価，QOLはPGCモラールスケール，介護負担感は多次元介護負担感尺度を用いて評価した。バイタルサインや治療結果は主治医とケアマネージャーに報告し，情報を共有した。1年間，40回の鍼灸治療により疼痛が軽減し，自立歩行とADLが維持された。客観的な評価では安定傾向が示された。介護者の満足度も高く，治療継続を希望された。鍼灸治療は多様な症状に適応し，在宅医療を担う医療として有効と考えられた。

頸部・顔面部などの体性感覚刺激が自覚的耳鳴に与える影響

鶴 浩幸¹⁾，安藤 文紀²⁾，皇甫 泰明¹⁾，
福田 晋平¹⁾，江川 雅人¹⁾，片山 憲史¹⁾

¹⁾ 保健・老年鍼灸学講座，²⁾ 明治東洋医学院専門学校

鍼灸治療が耳鳴を軽減させることがよくある。近年，耳鳴は聴覚の影響だけでなく，体性感覚（皮膚や筋肉から生じる感覚）を引き起こす刺激（筋肉の運動や電気治療，指圧など）の影響を受けることが指摘されており，鍼灸治療も体性感覚刺激の1種と考えられる。そこで，我々は耳鳴と体性感覚刺激の関係性を明らかにする第1段階として，本研究を行った。対象は静かな環境下で耳鳴を感じる健康成人27名（平均年齢25歳）とした。被験者は耳栓とイヤーマフを装着して，環境音が30dB以下の静かな部屋の中に座り，以下の3種類の刺激によって耳鳴が変化するか否かが検討された。刺激は「1. 頸や顔面の自動運動」，「2. 頸や顔面にある経穴（ツボ）の指圧」，「3. 手や頸にある経穴への電気治療」などが各30秒間行われた。その結果，自動運動により耳鳴の大きさが軽減した者は11名，指圧では15名，電気治療では23名であった。また，耳鳴の大きさを軽減させるには，自動運動より指圧や電気治療の方が効果的であることが示唆された。特に電気治療では耳の後下部に位置する完骨穴を刺激した時の効果が大きいことが分かった。なお，本研究はJSPS科研費基盤研究C24500840の助成を受けたものである。